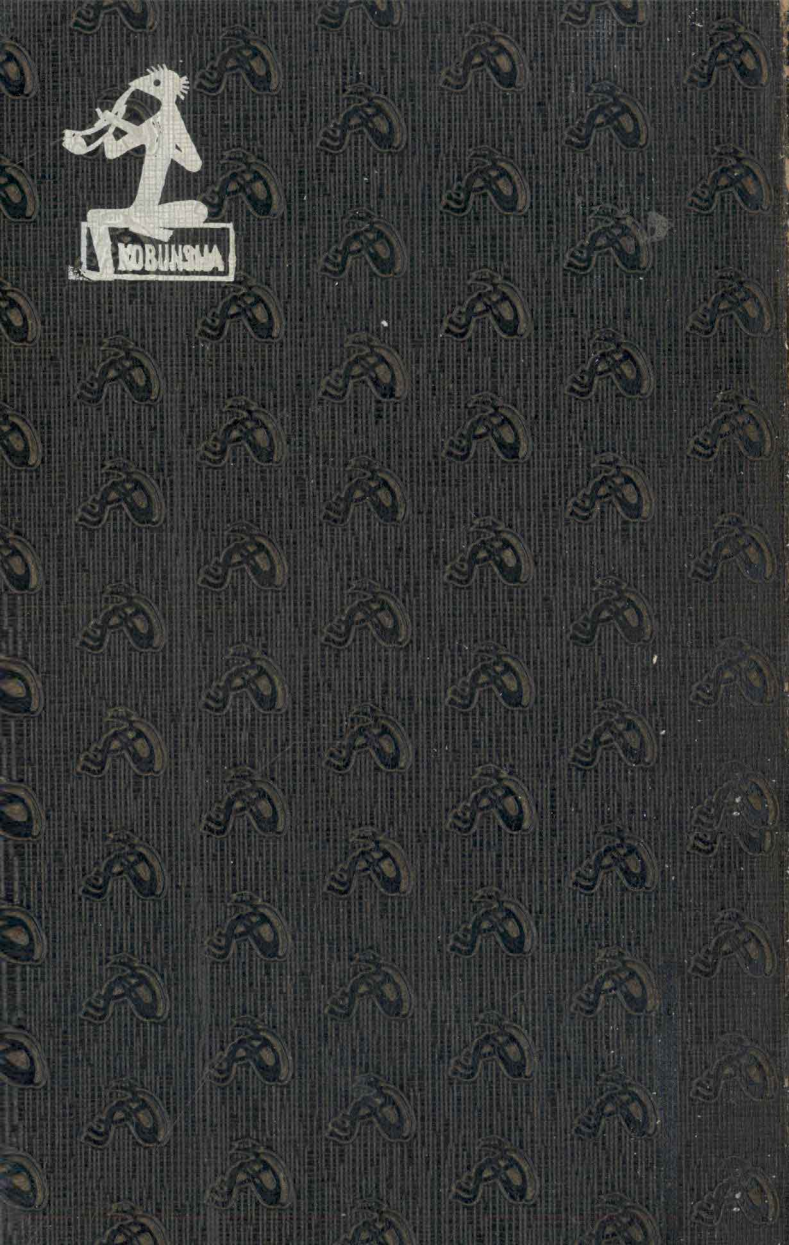




この本をお読みになった方へお願い

あなたはこの本を読まれて、どんな感銘を受けられたでしょうか。「読後の感想」を左記あてにお送りいただけましたら、ありがたく存じます。なお、このつぎには、どんな本を読みたいとお考えですか。

この本には、一字でも誤植がないようにと願っておりますので、もしも、お気づきの点がありましたら、あわせてお教えください。お手紙には、ご職業や年齢なども書きそえてくださいませんか。

東京都文京区音羽町二の一

光文社

神吉晴夫

長編推理小説 恐喝 かつあげ

昭和39年11月1日 初版発行

検印廃止 ￥270

著者 さ 佐 が 賀 せん 潜

東京都中央区銀座6-4
交詢ビル502号

発行者 神 吉 晴 夫

印刷者 盛 英 信

東京都文京区武島町2番地
慶昌堂印刷

発行所 東京都文京区音羽町2 株式会社 光文社
振替東京115347

落丁本・乱丁本は本社でお取替えいたします。

表紙の模様・意匠登録 116613

(関川製本)

© Sen Sago

恐 喝 かつあげ

さ 佐 が 賀 せん 潜



カッパ・ノベルス

目次

第一章	噂 うわさ の顔	5
第二章	黒の挑戦	31
第三章	擱 つか んだ鍵 かぎ	62
第四章	攻撃と防御 ぼうぎょ	89
第五章	黒の戦略	120
第六章	落ちた毘 わな	152
第七章	攻防の位置	186
第八章	消えた顔	218

本文のイラスト

藤松

博

第一章 噂の顔

1

国電山手線、代々木駅前広場を南へ進むと、私鉄閑急線、北新宿駅へ出る。駅にならんで、七階建の茶色の古びたビルがある。

開け放たれた入口に、閑急電鉄株式会社と金文字で書かれた鉄柱が、タイル張りの柱にはまっていた。

五月だというのに、新緑の樹木もなく、埃にまみれた街衢を、やや強い風が、窓ガラスを光らせながら吹いている。

いつもなら、社員の出勤時刻を過ぎた午前十時前は、人の出入りも少ないのに、この朝は人の群れが建物の中へ吸いこまれていく。ひとときわ目立つ長身の男が、人波を縫って、大股で歩を運んできた。

男の肩より上が、人の群れから抜け出し、無帽の半白髪が、乱れていた。男は、エレベーターの前で立ち止まると、ゆっくりと後ろを振り向いた。

大きな顔。驚を思わせるような、尖った高い鼻。ざらざらと光る窪んだ眼窩。いくぶん赤味を帯びた、引き締まった頬。分厚い唇。

男は、総会屋茂呂逸平である。

黒縁のロイド眼鏡をかけた中年の男が、茂呂の前まで走り寄ると、ぺこりと頭を下げた。この男も総会屋で、赤岩参六といい、茂呂の配下であった。

「先生、おはようございます。仲間うちは全部、統一行動を取る手はずがととのっております。ご安心を……」

「ご苦勞、きょうの総会は、七、八分とかかるまい」

二人は、それっきり口を噤むと、エレベーターで七階へのぼった。

七階は、全部大広間になっていて、定時株主総会の会場にあてられていた。赤岩は、「では」と言って会釈すると、会場へはいっていった。茂呂は、会場の右手の控室のドアの中へ消えた。

茂呂は、いならぶ十数人の重役陣に一礼すると、皮張りの椅子にふかぶかと腰をおろした。

「茂呂先生、ご苦勞さまです」

「先生が、おられるんで、大舟に乗った気持ちでいますよ」

「西北電鉄も、きょうの総会を押し切られたら、尻っ尾を巻くでしような」

「先生、なにぶんよろしく」

重役たちが、かわるがわる、そんな挨拶をした。社長の源田清蔵が、奥の椅子から立ち上がると、茂呂の側へ歩み寄り、

「茂呂さん、おしはきょうくらい、あんたの力を頼みにしたことはないよ。この会社の人間になって四十年、ずいぶん苦しいこともあったが、やはり西北電鉄は、怖い相手だから」

と、強ばった表情で言った。

茂呂は答えず、たばこの煙を、天井へ向けて吐き出していた。

「敵は、どんな緊急動議を出してくるのか、どんな手で、バランスシートの穴を突いてくるか、それがわからんからだ」

源田の頬は緊張で青ざめていた。

「社長、やつらがどんな手を使ってこようと、きょうの総会にかぎって、万全の布石を打っている。一挙にもみつぶすだけだ」

茂呂は、たばこの吸いがらを押しつぶした。源田の頬

に微笑が浮かんだ。頭の禿げ上がった、まん丸い源田の顔を、茂呂は睨むように眺めると腰を上げた。

茂呂は部屋を出ると、総会場へはいった。定刻十時に、まだ三分ほどあったが、五百人を予定した椅子は、ぎっしり詰まっていた。茂呂は、入口に近い椅子に腰をかけると、腕組みしたまま、会場を見渡した。

総会屋の元老格といわれる大久保勇三の、痩せた顔が、右の端に見える。隊長格の中島八郎の赤ら顔も、やや中央の席で天井を見上げている。中堅クラスの岡田、瀬尾、村山の顔もあった。

茂呂は、その一つ一つを確認してから、満足げに頷いていた。

東京には、数百人の総会屋がいた。いずれも、株式が上場されている会社の株を、十株から百株くらい持っていて、年二回の総会のつど、顔を出してくる。

総会屋のトップクラスになると、数百社から千社近くまで、株を持っている者もある。彼らは、AクラスからEクラスまでの、五階級ぐらいの格差があり、その格差によって、いわゆる、「挨拶金」の額がちがってくる。

Aクラスで三万円、Bで二万円、Cで一万円、Dで五万円、Eで三万円というのが相場だった。

この挨拶金をもらうと、総会屋は、総会の席上で、「賛成」、「異議なし」と叫び、会社の決算を可決へもっていくのである。

ところが、会社の問題があると、総会屋の動きは活発となってくる。社内に派閥争いがあるとか、経理に不正があつて、それらが外部へ洩れたりすると、砂糖にたかる蟻のように、総会屋たちは、それぞれ嗅覚をうごめかし、会社へ群がり集まってくる。

会社は、彼らを料亭でもてなし、通常の挨拶金のほかに、若干の金を包むのである。これらの金には、総会を無事にまとめてくれ、多少の不正があつても、見て見ぬふりをしてくれ——という意図が含まれていた。

関東電鉄には、総会屋がよろこぶような大きな問題があつた。

東京の地図を広げてみると、何本もの私鉄が、扇の骨のように郊外へのびている。京上、東京、武蔵、西北、京王、関急、東南、京浜というように、関東平野を縦横に走っている。

地図にはないが、扇の骨を、蜘蛛の巣のように、横につなげているのが、バス路線である。各私鉄は、バス路線で、横の連携を保ち、住民を運ぶことで、収益をあげ

てきた。

交通路線の発展は、宅地の造成計画をうながした。これにいち早く目をつけたのが、西北電鉄と東南電鉄である。こころみに、両社の決算報告書をみると、その事実をうかがい知ることができる。

西北電鉄は、I町、S町を起点とする全長百六十キロの電車路線を持っているが、半期間の収入のうち、電車収入が三十億円に対して、不動産収入が、二十億円となっている。

東南電鉄は、全長キロが、西北の半分の九十キロ弱なのに、電車収入が十八億円、不動産収入が十四億円となっている。つまり電車会社が、不動産で多額の利益をあげているのである。

私鉄会社は、東京の人口が郊外へふくれていく情勢に呼応し、宅地造成によって、大きな儲けを擱んでいたので。

ところが、関急電鉄は、宅地造成がおくれていた。その理由は、関急の首脳部が、観光事業に力を入れていたため、宅地造成が等閑に付されていたからである。

関急が、伊東、熱海、江ノ島、真鶴岬を路線上、持っていたため、自然に観光事業開発に力を入れていたから

だろう。

ここに西北電鉄の目が光った。

西北電鉄は、所沢、東村山、小平などから、関急路線の町田、東生田、登戸へ向かい、バス路線を開発すると同時に、沿線の田園緑野を買収し、大規模な宅地造成に乗り出してきた。

関急は、西北電鉄の方策を知ると、思い出したように、土地買収を妨害し、おくらせながら、土地の買いあさりを始めた。

買い占め競争によって、地価がはね上がっていった。宅地造成の場合、高価な土地を買ったのでは、儲けにはならない。西北電鉄は、土地買収をストップすると、関急電鉄の株を買いはじめた。

強大な資本にものをいわせ、四十五億円の株式の過半数を、掌握しようとしたのである。かくして、西北電鉄は、すでに二十八パーセントの株を、買い占めていた。

総会屋茂呂逸平は、関急の社長源田清蔵から、この情勢を聞かされ、五月十六日の定時総会の対策を、一任されていたのである。

茂呂は、まず大久保勇三と中島八郎を、赤坂の料亭酒

井に招待し、仁義を切った。二人にそれぞれ、三十万円の挨拶金を渡し、

「今度の総会については、なにぶんよろしく」と、頼んだ。二人が、快く承知すると、茂呂は、配下の

赤岩参六を走らせ、数百人を越す総会屋全部へ、通常の挨拶金に、それぞれの格に応じて、プレミアムをつけ、筋を通しておいた。

十時の開会が近づくにつれ、茂呂の体内に、熱気をおびた興奮が、波を打ちだした。十年間、茂呂はこうして総会を牛耳り、眺めてきたが、きょうの総会は、いつものそれとちがひ、心気のかたまりを自覚していた。

二十八パーセントの株主である西北は、必ず何人か、あるいは何十人かの者に端株を持たせ、この中にまぎれ込ませているにちがいない。やつらは、何をほざこうとするんだろう。

茂呂は、見えざる敵を模索するように、一人一人の後ろ姿を、眺めていった。数人の総会屋が、茂呂の視線を知って、「おれはだいじょうぶだ」と、いわんばかりの表情で、茂呂へ視線を送った。

定刻十時——。

進行係が、「ただいまから、定時総会を開きます」と

言った。源田社長が、議長席につき、簡単な挨拶をした。経理部長園部高夫が、決算報告の説明をはじめた。こまかい数字を、要領よく数分間で説明した。

源田社長が、会場を見回した。そのとき、

「八十二番、質問があります」

会場のまん中あたりから、突然、背の低い中年の男が立ち上がると手を上げた。八十二番といったのは、株主が、総会場へはいるとき、受付で案内状を見せ、株主であることを確認してもらおうと、番号札を渡される。それによって、何番はなんという株主か、ただちにわかる仕組みになっていたのである。

茂呂は、目をみはった。

その時、茂呂の後ろへ、会社の伝令が近よると、

「八十二番は、総会屋三木忠男です」

と、低声で告げた。

源田が八十二番に発言をゆるした。

「ただいま拝聴した決算報告によると、固定資産の評価額が、二百十五億七千五百万円となっておりますが、前年度後期の、固定資産の評価は、二百十五億六千五百万円となっております。半年間ではあるが、当社は、宅地造成のため、西生田地区に六万坪、矢野口に三万四千坪、

町田地区に十二万坪弱というように、それぞれ膨大な宅地を買収している事実があるのに、前年後期より、わずかに一千万円しか評価額を増額していないのはなぜなのか。明確なご説明をうけたまわりたい」

言葉の抑揚にやや大阪弁のなまりがあるが、金属音のような、よく透る声で一氣にまくしたてた。経理部長の園部が立ち上がった。

「ご指摘の土地の一部は、たしかに当社が、宅地造成のため、買い入れました。しかし、地価は、ご承知のように金詰まりのため、値上がりがストップしているばかりでなく、地域によっては、値下がりしているところもありますので、かような評価を出したわけであります」

「ただいま、一部を買ったと言われたが、二十一万坪全部を、関急が買っていることは、明白な証拠がある」

「さようなことはありません。その一部、二万数千坪にすぎません」

園部が、立ち往生していると、「三十九番」と、どら声を張り上げ、大久保勇三が立ち上がった。

「八十二番の意見には異議がある。固定資産の評価は、ボロ会社ほど過大に評価するもんじゃ。当社は、堅実だからこそ、低めに評価しとるものと思う。経理部長の説

明に、異議なし」

大久保が着席しないうちに、「十八番」、「百五番」、「三百十七番」というように、十数人の総会屋が立ち上がって、「異議なし」と、どなるように発言した。そのざわめきが、いったんしずまると、三木は三度目の発言を求め、立ち上がった。

「一部の怒号によって、公正であるべき議事が、うやむやに葬り去られてはならんです。経理部長は、二十一万坪のうち、二万数千坪だけ、会社を買収したと言ったが、私が調べたところによると、二十一万坪全部について、関急の名前で、売買予約の仮登記がしてあった。これでも、会社は買っていないと言うのか」

三木は、かん高い声で叫びながら、いならぶ重役たちを睨んだ。源田社長が、経理部長の顔をちらりと眺めてから、腰を上げかけた。その瞬間、茂呂の長身が、ばねではじかれたように立ち上がった。

「三百番、発言を求めます」

茂呂の声は、会場の窓ガラスが、ひび割れるほど、強く鳴り渡った。鏽のある、腹の底からほとばしり出るような声だった。

「私は、問題の土地について調査をした。もちろん株主

として、増資含みの会社事業に、関心があったからだ。調べてみると、二万三千四百坪が、会社名義で登記済みであった。残り十八万何千坪かは、たしかに会社名義で仮登記がしてあった。私は、地主に当たって調査した。ところが、一割の手付金をもらっているだけで、残金は未払いになっていた。したがって、このぶんは、まだ会社の所有になっていないから、資産に計上していないことがわかった。バランスシートは、企業の財政状態および、経営成績に関して、真実の報告を提供するものでなければならぬ。手付金を払っただけでは、会社の財産には、なっていないのである。また、その評価についても、金融引き締め現況をみきわめ、やや下回る評価をしたという、経理部長の説明は、会社の健全性を示すものであって、われわれ株主には有利といわねばならぬ。以上の見地から、議長は、すみやかに、出席株主各位の議決を取っていただきたい」

茂呂は、終始、三木忠男の後ろ姿をとらえながら、大声をあびせかけた。

三木が立って、「手付金の一割は、どこから出た金だ。経理不正だ。脱税だ」と、わめくように叫んだ。

議長が、「決を取ります。ご賛成のかたは手を上げて



ください」と、マイクで告げた。一斉に手が上がった。
「総会荒らしをつまみ出せ」

「賛成」

「異議なし」

怒号乱れとぶ中で、三木の小さな体が、聞き取りがたい叫びをつづけていた。

2

総会は終わった。

茂呂は、人込みを避けて、一人で階段をおり出した。

茂呂はときどき、階段の途中で歩みを止め、三木忠男の風貌を、まぶたの裏にえがいた。

三木の叫びが、多数の怒号で押しつぶされ、決算承認の総会が終わったとき、茂呂は出入口で、三木忠男と顔を合わせた。

丸顔の色白の背の低い男だった。一見してイギリス製とわかる背広の胸を張り、茂呂を睨んだ。その冷たい眼光が、茂呂の目に突き刺さるように沁みこんだ。

「茂呂さん、お返しはいずれ……」

と、三木が言って、小走りに人込みへまぎれ去ったとき、茂呂は口もとに微笑を浮かべ、へなんだまだ若僧じやな

いかゞと、つぶやいた。が、その瞬間、三木が人々の肩の間から、茂呂を振り向いているのに気がついた。茂呂は、なぜか勝利感とはちがった、薄気味わるいものを感じとった。

まっ黒い髪を、七三に分けた色白の童顔は、三十代になつたばかりのような、若さが溢れていた。身長は一メートル六十センチ足らずで、みるから貧弱な体軀だったが、茂呂には鋼鉄のような強靱さが受けとめられた。

顔の輪郭も小づくりで、高くないが鼻筋がとおり、やや受け口の口もとに、複雑な笑いを浮かべ、足早に去る動作に、蜥蜴のような敏捷さがあつた。

茂呂は、総会屋三木忠男の名前を、聞いていた。三、四年前から、ちらりと耳にはさんでいたし、茂呂が顧問をしている会社の株主にも、ところどころ名前を連ねていたからである。

去年の十一月の総会期に、茂呂の得意先である桜ゴム株式会社の時時総会で、社長派と専務派との内紛が表面化し、問題になる形勢があつた。その時も、茂呂は、大久保、中島以下の総会屋に渡りをつけたが、三木に対しては、赤岩参六を使者として、三千円の挨拶金を持たしてやった。が、三木は、「おれは総会屋じゃない。誤解

せんでくれ」と言つて、その金を赤岩に突き返した。

それ以来、茂呂の頭の中に、三木忠男の名前はこびりついてしたが、へ小僧の戯言くらしいに考え、総会対策のリストに入れていなかったのである。

が、茂呂はこの日はじめて、三木の正体を見とどけた。固定資産の評価には、たしかにからくりがあつたが、三木は、数字の裏側を、掘り起こすところまでは、手を染めていなかった。だから、きょうの総会は、助かったが、もしも三木が、その実体を掴んでいたとしたら、総会は收拾がつかず、流会の恥をさらしていたかもしれないかつた。

「ミ、キ、タ、ダ、オ」

茂呂は、ゆつくりとその名を口ずさみながら、四階の会議室のドアを開けた。

社長以下十三人の重役が、一斉に立ち上がると、茂呂に向かって最敬礼をした。

「先生のおかげでした」

「おみごとな演説でしたな」

「これではっとしましたよ」

「三木忠男って、何者なんです？」

「あの金切り声みたいな切り込みは、思わずぞっとしま

「それだよ。たしかにこっちは、宅地造成につきちゃ、手おくれた。観光のほうに儲かるもんだから、後手（ごて）を踏んでしまったよ」

「今さら、それを言ったってはいまらん。西生田、矢野口、町田を結ぶ三角形の、数百万坪の土地に、西北電鉄が田園都市を作ったとしたら、敵を儲けさせるために、こっちの電車が、お客を運ぶ結果となるわけだ」

「だから、敵の一等地のどまん中に、こっちが土地を握ってはいけるが……」

「怖いのは、経理のからくり……。株の買い占めと、社内の攪乱工作……」

「他人ごとみたいなことを言わんでくれ。わしは三木の発言こそ、三木を抱きこんだ敵が攻撃の狼煙（ろうえん）を上げた証拠だと睨（にら）んでいるが」

「三木はなんとか料理する」

「自信は？」

「源田さん、茂呂逸平を見くびらんでくれ。こう見えても、まだまだファイトにあふれておるんだから」

「それを聞いて安心したよ。ちと早い、昼めしでも、いっしょにどうだろう」

茂呂は、源田社長といっしょに、彼の愛用車で帝國（ていこく）ホ

テルへ向かった。

茂呂逸平は、根っからの総会屋ではなかった。十年前、関急電鉄の総会で、総会屋の蠢動（しんどう）を押さえ総会を利用して一挙に賃上げ闘争を解決しようとした労働組合を、制圧したのが、総会屋となるきっかけとなったのである。

昭和二十六年の十一月、私鉄労連は、平均三千九百円のベースアップを旗印に、スト突入の気構えを示した。関急労組も、労連の指示に従い、すでに二回にわたり時限ストを断行し、その月の飛石連休をめざして、会社側が要求をのまなければ、ストライキを決行する——と宣言していた。

こんな騒ぎの最中に、関急の定時総会が開かれた。会社側では、労組対策に腐心していたときなので、総会屋対策を忘れたまま、会場にのぞんだ。

「茂呂さん、きょうの総会には労組の幹部連中もきておる。株式を開放してあるんで、うちの会社じゃ、運転手車掌にいたるまで、何がしかの株主になっているからだ。彼らが総会場で、スト問題を持ち出したら、茂呂さん、そんなときはあんたの力で、押さえてもらいたいんだ

が」

茂呂は、源田から、真剣な表情でたのまれた。茂呂は、領いて総会場へはいった。

経理部長が、決算報告書の説明を終わると、思いがけない事態が発生した。総会屋の大久保勇三が、発言を求めて立ち上がると、

「私は株主として、ただいまご説明のあった、当期決算について、賛成できないものがある。すなわち、有形固定資産の項目のうち、建設仮勘定として、十一億八千万円を計上しているが、これは事実^{たじふじ}に反するのじゃないか。当社が、昨年秋季以来、多摩遊園^{たまゆうえん}の拡張建設のため、大和建設株式会社に、二十四億円の巨費を投じ、請け負わせたことは、否定できない事実である。しかも、その大部分が完成している現在、建設仮勘定が十一億八千万円であるはずがない。会社の首脳部は、その差額十二億二千万円をどこへ隠匿^{いんごく}しているのか。それとも、大和建設の二十四億は、架空の契約金だったというのか、その真偽をうけたまわりたいのである」

と、鏑のある声でしゃべりまくった。

この発言がきっかけとなって、労組の連中が、順々に立って、「経理不正だ」、「隠し金を出せ」、「われわれ

の質上げを認めろ」と、怒号を繰り返した。

満場騒然となり、テーブルを叩き、足を踏み鳴らし、果ては椅子を投げつける者まで現われ、あわや暴動と化す形勢となってきた。

茂呂は、テーブルの上におどり上がると、「静まれ、ここはストライキの場所ではない。労働者諸君の利益を守る方法は、ほかにあるはずだ。諸君、経理の不正があるかないか、おだやかに議事を進めようじゃないか」となった。

容貌怪異な大男が、長髪を振り乱し、胸をそらし、スコップのような大手をひろげ、立ちほだったので、群衆は一瞬、気をのまれたように静まった。

茂呂は場内を、鋭い眼光で見渡すと、演説をすすめた。

「ただいま、建設仮勘定にごまかしがあるやの発言があったが、思いがけないのはなほだしい発言である。私は、大株主の一人として、多摩遊園の拡張については、大いに関心を抱いていた。もちろん、大和建設との契約も調べてある。

なるほど、さきほどの発言のとおり、二十四億で契約がしてあった。が、会社は、そのうち十一億八千万円し